

ドイツ女性史の近年の研究動向

— ヴァイマル共和国期における身体の政治学 —

石 井 香 江

1. はじめに

先頃『父の国の母たち』¹⁾の著作で知られるクロード・クーンズが来日し、東京大学において「戦争と記憶におけるジェンダーと人種の動員：ドイツと日本の例」²⁾と題する講演を行なった。それに続いて、ドイツー日本研究所主宰の国際シンポジウム「歴史の政治学—フェミニスト研究者が戦争戦後を考え直す」が、二日間にわたり早稲田大学にて開催され、日・独・米の女性史ないしジェンダー史の研究者たちが一同に会した。初日はフェミニズム歴史研究の方法論と課題について、フェミニズム論やナショナリズム、性暴力問題という観点からの報告がなされ、二日目は動員と女性のエージェンシー問題や歴史の語り方についてのケース・スタディーが紹介された。戦間期・第二次世界大戦の歴史をジェンダーと人種という観点から読み直す、厚みのある研究が着実に蓄積されつつある。確かにそれらを国際比較するという段になると、正直なところ困難が予想される一幕もあった。しかし、この場で提起された重要なテーマと課題が若手の研究者の手に委ねられ、今後深化される可能性は大にあるだろう³⁾。そもそもこうしたテーマに関心を集める火付け役の一人となったのは、今回の二つの企画に関わった上野千鶴子氏である。氏が1998年に『ジェンダーとナショナリズム』を発表したことを機に、シンポジウムの報告者の一人でもある鈴木祐子氏との間に「歴史家論争」が繰り広げられたことは記憶に新しい。鈴木氏は日本の女性運動史に取り組んできた著名な女性史家であるが、平塚雷鳥や市川房枝ら日本の代表的な女性解放運動家の「戦争協力」を問題化してきたことでも知られている。上野氏はこれに対し、当時は誰も「超越的・歴史外的視点」を持つことはできなかった、という論拠で批判を展開してきた。

ジェンダー分離体制の強固であった日本において、女性の「国民化」は戦闘参加を通してではなく、平塚や市川のように「妻」や「母」を称えることによって可能であった。しかし上野氏によれば、こうした傾向は日本のみならず他の国々にも見られ、少数民族や被抑圧民をも巻き込んで進行していたという。ここでは紙幅の関係上二人の論争に深入りすることは控えたいが、その争点が女性の「戦争協力」をめぐる評価であったことは注目に値しよう⁶¹。翻って日本のドイツ女性史研究の成果に目を向けてみると、1990年代初頭にはこの問題が既に提起されていたばかりか、現在もその論争は継続中であり、アクチュアルなトピックであり続けているからである。

1993年には少子化を危機と捉える当時の日本の言説と、世紀転換期のドイツにおけるそれとの類似に着目し、家族という私的な問題が公的領域に現れる過程を歴史的に検証する研究が発表された。国民国家において子どもは国力の源泉であり、その子どもを産み・育てる母親業が特別な意味を帯びるようになったことが示唆される⁶²。しかし母親業は、女性の自己実現を制約するばかりではなかった。母性を標榜することで公的領域への参画を求めた女性たちが、近代国家の枠組みを越えられないままに「国民化」された経緯を跡付けているのは、姫岡とし子氏の研究である。姫岡氏は同年に刊行された『近代ドイツの母性主義フェミニズム』⁶³において「母性を切り口にドイツの「家族」と「フェミニズム」と「近代社会・国家」の関係」を検討している。本書で「母性主義フェミニズム」とは「母性精神を社会に浸透させることがドイツの将来のために絶対に必要という信念に燃え、母性を立脚点にして女性の活動の場の拡大と地位の向上を目指した」穏健派のフェミニズムとして定義される。姫岡氏は19世紀から世紀転換期の女性の状況を俯瞰して、なぜ女性運動の活動家が母性に可能性を見出し、母性主義フェミニズムを形成したのかを明らかにする。中でも労働者層の社会問題に取り組む社会福祉活動や、戦時体制下の祖国奉仕に、母性主義フェミニズムが活躍の場を見出していく背景が明らかにされる。だからといってこの動きが、「近代化の形成に寄与した歴史推進力」として、手放しに評価されるわけではない。例えば母性主義フェミニズムの母性観がヴァイマル共和国期の新しい性モラルと衝突したことが紹介されている。母性保護連盟の指導者の一人である H. シュテッカーは、母性を「制度化された婚姻」切り離したために、母性主義フェミニズムとは相容れなかった。さらには女性を

国民国家に統合しようとするあまり、ナチズムの民族共同体の思想に共鳴するようになった点など、母性主義フェミニズムの限界も指摘されている。他方、一昨年刊行された田村雲供氏の『近代ドイツ女性史—市民社会・女性・ナショナリズム—』も、「妻・主婦・母」という使命を担う女性運動家たちがナチズムに関わる経緯を跡付けるが、その因果連関や女性側の葛藤については、姫岡氏のそれと比べると明らかではないと評価されている⁷⁾。いずれにしろ女性の「戦争協力」を、今改めて国民化する女性主体と捉え直して問題化するとすれば、これまでの議論の流れを押える必要があるだろう。その際に見落とせないのは、女性の「歴史推進力」という観点である。女性の「歴史推進力」とは、ドイツの母性主義フェミニズムが近代社会の形成に寄与したという文脈で姫岡氏が用いた概念であるが、それを上野氏は「歴史の主体」とも呼んでいる。いずれも1980年代に起きた女性史のパラダイム・チェンジを契機に、女性を歴史にとって受動的な存在としてではなく、「歴史をつくりだす主体的な意思決定者」として再構成する際に浮上してきた概念であった⁸⁾。ところが、女性がある歴史的・社会的文脈の中で主体となろうとする時、それが皮肉にも「戦争協力」に結びつくに至ったことを姫岡氏は明らかにした。上野氏は近代国家の枠組みの中で女性の解放は不可能であるとまで断言する。いずれの場合も程度の差はあれ、「女性主体の国民化」を「戦争協力」と見なして弾劾するだけではなく、女性をそこに至らせた多様な回路なり、文脈に着目する立場である。本論でもこうした立場に依拠すると思われる欧米の先行研究を、幾つかの角度から紹介してみることにしたい。

2. 前 史

国民化する女性主体とそのエージェンシーが問題化されるドイツ特有の文脈を押さえる前に、まずはドイツにおいて女性史が注目されるようになった経緯を手短に紹介することにしよう。ドイツの女性史に注目し本格的にその研究の必要性を説いた初期の研究者として、イギリス人のドイツ史研究者 R. J. エヴァンズはあまりにも有名である。社会民主党や自由労働組合を背景に登場した女性指導者が、女性解放運動に強いインパクトを与えたという理由から、エヴァンズはドイツ労働運動史の文脈における女性運動史に関心を向けた。しかし彼

はそれと同時に、従来であれば学問的な研究の対象にもならなかったような、女中、売春婦、犯罪に関わった女性、女性の教師、農婦といった多様な女性を、今後の歴史研究の対象にするべきことを提起した⁹⁰。こうした動きは伝統史学に対する批判が勢いを増した1960年代初頭に、H.U. ヴェーラーや J. コッカを中心とするビーレフェルト学派が成立し、社会史 (*Gesellschaftsgeschichte*) が制度的に確立されたことと決して無縁ではない。第二帝政時代からナチズムへ、そして戦後のドイツに連続する「過去の遺制」に対する批判こそが、批判史学としての社会史の原点にある。それは戦後に至るまで根強く主張されていた、ドイツ近代史とナチズムの連続性を否定する「特有の道」(*Sonderweg*) テーゼに反旗をひるがえすものだった。伝統史学の影響を強く受けていた、従来の歴史学の関心が政治や外交の領域に偏っていたのに対して、社会史は社会を全体的に把握する歴史学を目指し、その分析の射程にはこれまで光を当てられてはこなかった一般市民層や労働者が含まれていた⁹¹。とはいえ社会史で重要となる分析概念は、依然としてジェンダー中立的な「階級」であった。しかしながら労働者階級や市民層も決して一枚岩的に捉えることはできない。例えば、女性と男性から成る労働者階級や市民層の内部には、鋭い利害の対立があったことを周知のように女性学が明らかにしてきた。こうした例に見られるように、女性学が女性史にインパクトを与え続けてきた事実は看過できない。次に女性学の進展と既存の歴史学内部の動きとに着目して、ドイツにおける女性史成立の経緯と現在の研究動向について検討してみることにしよう。

3. ドイツにおける近年の女性史の研究動向

3-1. ドイツにおける女性史登場の経緯

1970年代後半より女性史研究を発表していることで知られる、カーリン・ハウゼン (1938～：ベルリン工科大学コミュニケーション・歴史学科教授、学際的女性学・ジェンダー研究センター所長) によれば、1970年代初頭に女性史は一般史に対して批判的なまなざしを向けるようになったというが、この経緯を彼女の叙述を参考にしながら以下に紹介することにしよう。この変化は1960年代後半に世界的な規模で起きた解放運動や「パラダイグマの転換」を受けて、学問の世界でも刷新が迫られていた状況に呼応していた。ドイツの女性学はア

アメリカのそのような制度的・人的支援がなかったために、周縁的な学問であった。ところが1970年初頭には C. デルフィの『何が女性の主要な敵なのか——ラディカル・唯物論的分析』⁹⁹をはじめとする、英・米・仏の重要な女性学の著作がドイツ語に翻訳され、女性学の新しい研究成果が吸収されるに至った。これに力を得た女性史は、伝統史学を批判する「下からの社会史」であるのを標榜すると同時に、女性学の問題意識を強く打ち出した。例えば当時、女性史の中で議論された問題を幾つか挙げてみると、「19世紀の家事の歴史」、「近代家族の誕生の歴史」、「19世紀における家族の画一化」、「中絶をめぐる女性の闘争」、「売春婦や悪しき母親といった異なる女性の排除」、「ナチス政権下の女性の抱えた矛盾」などがあった¹⁰⁰。それは現在のような女性の家事や出産を、近代の産物として歴史的に相対化することによって、女性が家事や出産を一手に引受けることや、良き妻であり母親であることを自然とする通念を、批判するものだったと要約できよう¹⁰¹。こうした諸前提の弊害は女性の家事や出産を無償労働として正当化することにとどまらない。例えば歴史人口学は女性が出産を拒否するという事態を想定できないために、なぜ西欧においては19世紀以来出生数が低下しているかを十分に説明しえないという。

以上のように1970年代にドイツ女性史で新たに扱われた問題は、無償労働としての家事労働や、女性のセクシュアリティを「産む性」に一元化することに対する批判をはじめ、ここでは紙幅の関係上十分に説明できない重要なテーマである、公的領域と私的領域が明確に分断されることへの批判¹⁰²、そしてナチズムとの関連で女性の「戦争協力」を問題化すること、そのいずれかにほぼ収斂していたと思われる。しかし近年、世界的に見ても女性史研究の対象や方法の多元化が進行する中、こうした類型によって全ての動向を包括することは不可能となっている。女性史が量的にも質的にも深化する契機ともなった、二つのパラダイム転換について次に検討してみることにしよう。

3-2. 身体^{ポリティクス}の政治学

日本や欧米圏における近年のドイツ女性史の研究動向を整理すると、戦間期にあたるヴァイマル共和国期における身体^{ポリティクス}の政治学に、研究者の関心が集まっていることが分かる。例えば C. ウスボルネは『ヴァイマル期ドイツにおける身体^{ポリティクス}の政治学——女性の再生産の権利と義務』において、ヴァイマル共和国

期をジェンダーと身体という切り口から再構成している。19世紀末に人口増加は兵力や国家の発展と結び付けられていたので、出生率の減少は結核・アルコール中毒・性病のように国家の危機として受け止められていた。出生率の低下は全西欧諸国が経験したが、ドイツではその速度が急激であったために、危機意識はいやが上にも高まった。そのため個々人の性行動を社会が規制することが求められたのだが、それを正当化するために人口統計などの新興諸科学が無批判に利用されたという。出生率の低下の原因は嫡出子の数の減少、婚外の性交渉の増加に帰せられ、中絶や男性同士の性交渉が法的な処罰を受けた。とはいえ個人の生活への国家の介入に対して、沈黙が守られていたわけではなかった。例えば母性保護連盟や科学的人道委員会が、生殖や婚姻とは切り離されたセクシュアリティの啓蒙活動を繰り広げていた事実も、併せて紹介されている³⁹。つまり身体をめぐる政治学^{政治学}とは、女性の身体は人口政策や優生学の客体であり、その言説が受動的に刻印される場であると同時に、それに抵抗する拠点でもあるという見方である。アメリカの有名な女性学雑誌『サインズ』に掲載された、K. カニングの「言語論的転回 (linguistic turn) 以降のフェミニズム歴史学——言説と経験の歴史化」という論文を導きの糸として、このアプローチに今少し踏み込んでみることにしよう。カニングによれば「言語論的転回によって主体から自律的で啓蒙された個人という「負荷」が剥ぎ取られる今、個人は経験、アイデンティティ、そして階級という言葉として再考、書き直さねばならない」が、同時に「テキストの受容、競合、多様な意味を分析することで…言説分析が主体を「単にシステムを再生産する者」に矮小化してしまう傾向」は退けなければならないという。労働者の意味世界は労働と家族、隣人、そしてコミュニティとの関係から具体的に構成されているからである。そのケース・スタディーとして繊維産業に従事していたドイツの女性労働者が採り上げられている。1890年代に女性労働が新しい社会問題となるが、戦争、革命、戦時体制からの復帰と、それに続く職場からの撤退を経験することで、女性は1920年代になって初めて、変革を求める複数の主体を獲得したという。例えば1918～20年に社会民主党系の繊維産業組合 (DTAV) に加盟する女性労働者の数は450%も増大したのに加え、彼女達は産休を求めて積極的に組合活動を展開した。ここからカニングは身体を、言説が配置される社会的空間と主体が交差する場、そこで欲望と剥奪の身体的経験が、せめぎあいながら主体を形成する場として

捉え返し、ヴァイマル共和国期の女性身体を、性的に解放された「新しい女」という言説が書き込まれるばかりでなく、エージェンシーや抵抗の基盤となる生きられた経験としても表現している⁸⁸。

こうした見方の出現は、女性史が次のような二つのパラダイム転換を迎えたことと無縁ではない。いわゆる「言語論的転回」によって、歴史家の認識が批判的に問い返され⁸⁹、自明であるとして疑われなかったジェンダーや身体が、社会的に構築されたものとする認識が広まったことに加え⁹⁰、第二波フェミニズムの影響で女性の多様性に光が当てられるようになり、被抑圧史観が検討に付された。女性史と女性学の展開の足並みの一致はこれまでも指摘されてきたが⁹¹、ドイツでも1980年代には一枚岩的でない女性像に関心が向けられるようになった。歴史の暗がりから掘り返される女性は、もはや女傑でも弱々しい犠牲者でもなく、従来むしろ否定的な位置付けを与えられてきた女性でもあった。それは女性賃金労働者の先駆であり、それゆえに「売春婦」と中傷されたという女中⁹²や、非因習的なライフスタイルを実践した「新しい女」⁹³、ナチスに協力した女性達⁹⁴、そしてナチズムの犠牲者でありながら、その存在についてこれまで多くが語られてこなかった女性同性愛者⁹⁵や、強制断種手術(Zwangssterilisation)⁹⁶の犠牲となった女性達であった。次にこうしたトピックの中でも、冒頭でも触れたように研究の蓄積が進む女性の「戦争協力」の問題と、ドイツ以外の欧米諸国でも近年関心を集めつつある、女性同性愛の意味を問い直す研究動向を紹介することにしよう⁹⁷。

3-3. ナチズムと女性

1945年以降ナチスの制度や組織の分析は、アングロ・サクソン系の西欧民主的な、すなわち法治国家の観点からなされた。その結果ナチスのイデオロギーやそのシステムは、独裁あるいは全体主義国家と評価された。これはマーティン・プロシャートらが主張した相対主義テーゼで、ドイツ・ファシズムの特殊性、あるいはヒトラー個人の狂気を強調するアプローチである。しかしこうした見方によって「第三帝国がドイツ史における奇異な幕間劇にすぎない」ことを正当化し、第三帝国において「普通の人々」が果たした役割を見逃すことにもなりかねない⁹⁸。ナチス政権下で女性が果たした役割に関心を集め、研究されるようになった理由もここにある。こうした問題感心を持つ研究を戦後になって

初めて発表したのは J. C. フェストであるが、それはヒトラーが小市民女性たちの「欲望の対象」であったと主張する点で問題を孕んでいた。こうした心理学的説明によっては、ナチス政権下で女性の果たした能動的な役割を、十分に説明することはできない。とはいえ「性別は問題とならない全体主義システム」において、「全ての差異が最終的には止揚された」という彼の指摘は、女性の「戦争協力」という問題を、女性が性差を超克するという観点から捉え返すのを可能にする⁷⁰。

前述のように1960年代から70年代の初めに社会史の研究がドイツでも始まり、歴史学も新しい時代を迎えた。T. メイソンはナチス政権下の女性をナチスの社会政策や人口政策の客体として、そして戦時経済に不可欠の産業予備軍として把握した⁷¹。1970～80年代には J. シュテファンソン⁷²や冒頭で紹介した C. クーンズらアングロ・サクソン系の研究者が現れたが、女性を「加害者」として捉えるその大胆な見方は、当初ドイツ本国では受け入れられなかったという。1970年代末期には「新しい女性運動」の進展に伴って、女性の解放と抑圧の歴史に対する関心が高まった。続いて G. ボックが女性史の多様性を宣言したことからも窺われるように⁷³、1980年代にはジェンダーという概念が社会的カテゴリーとして導入された結果、女性史は新たな局面を迎えることとなった。G. シュワルツ⁷⁴らによるナチス政権下の女性の多様な像を伝える研究がその良い例であり、ナチス政権に協力していた女性の状況や、女性にまつわるイデオロギーを詳細に紹介している。女性の「戦争協力」に対する評価もこうしたプロセスの中で洗練され、女性の受動的で無批判な態度を弾劾するものから、近年では次に紹介するように、女性が主体的にナチスに協力したその理由を、女性を取り巻く状況から内在的に説明しようとする研究も生まれている。

こうした研究の独自性は、例えば次に紹介する C. クーンズの論文と比較すれば明瞭になるだろう。クーンズは第二次世界大戦下におけるドイツとイタリアという、二つのファシズム国家の女性に対する態度と政策を比較している。両国ともに女性に母親役割を期待した点が共通しており、その期待に応える限りで、女性の社会進出・党での活動が許されていた。クーンズはナチスの幹部として活躍していた女性達の言動ばかりでなく、ナチスに抵抗運動を試みた女性の姿も紹介し、ナチスに対して女性が多様な形で反応をしていたことを明らかにする。ファシズム国家は女性に父や夫に対する依存から自由になる機会を

与えると同時に、女性を男性優位主義的な国家の下に服従させる。そこで女性は国家に期待される女性である限り、一私的領域で伝統的役割を遂行していれば、自由な力の行使を許されたが、男性とは決して平等にはなりえなかったことが強調される⁹³。しかし、ここに世代という観点を加味するとどうだろうか？

第一次大戦後には革命的な激変が続き、不況がその後を追った。この転回点を前後する世代の経験は全く対照的なもので、世代間の闘争がヴァイマル共和国期に顕在化した。特に1914年以來、困難を乗り越え、指導者のもとに団結した若い世代は、政治的に重要な役割を果たすという使命感に燃えていた。彼らは青年組織を結成したが、後にナチスを支持するケースも中にはあったことが知られている。従来の研究ではこうした青年組織の担い手に暗黙の内に男性が想定され、ジェンダーという問題が無視されてきたと E. ハーベイは指摘する。ハーベイは同時代に生きた人々の著述や発言から、女性の青年組織の存在を明らかにしている。その内に占める女性の数は1928年に実に全体の約33%を占めていた。ハーベイはプロテスタントを母体とする、中流階級出身の比較的高学歴の少女に担われた三つの青年組織に光を当て、少女達が世代闘争をどう捉えていたか、ナチスをどう受け止め、なぜそこで両義的な態度をとったのかを、母体を異にする他の組織と比較しながら考察している⁹⁴。

H. マンもヴァイマル時代において青年運動が女性にとって重要な位置を占めていたと指摘する。青年運動は、「民族の自己分裂」は「民族共同体」によって克服されると信じ、政党政治を根本的に拒絶した。国家は指導者とそれを支持する者という図式に則って建設されなければならなかった。この運動が女性にとって魅力だったのは、そこでは女性も青年期を体験できたからであった。女性は家族から離れて自由に行動し、因習的な役割規範を破る機会も与えられたのである。女性達はその中で、子どもを産み、教育するなどの女性役割を受け入れることで、女性が影響力を及ぼすことのできる圏の保持に務めた⁹⁵。このように男女の性別役割は分離していたものの、だからこそ両性が対等であるという「同志の原則」こそ、若い女性ナチス黨員を惹きつけたという⁹⁶。U. フレーフェルトも当時の若い女性にとって、ナチスの青年同盟の掲げる「同志、同世代の共同体」は魅力的な言葉であったと指摘する。ナチスが組織したドイツ少女同盟（BDM）は若い女性たちの余暇生活に、キャンピング、自転車旅

行、ワンダーフォーゲル、スポーツといった魅力的な機会を提供した。しかし同時代の女性たちの証言によると、解放された娘達に対し母親達は概して否定的であった。娘の自由を制約する母親への反発と自立願望も、娘たちをBDMの活動へと駆立てたという⁹⁹。

D. リースは第一次世界大戦終結から1930年代にかけて生まれ、第三帝国時代に社会化の時期を経てBDMを組織化した世代を「BDM世代」と名付ける。この世代はそれまで女性に形成された集団に比して、群を抜いて政治的であったという。それはフレーフェルトらが主張するのと同様に、ナチスが若い女性を動員するために、従来女性の役割を規定していた家父長的、地域的、宗教的拘束を除去するような政策を展開していたからであり、それが世紀転換期に生まれ、新しいジェンダー・パラダイムの中に育った少女達に訴えかけたと分析する¹⁰⁰。

ところで、当時女性が活躍することが可能であった場所は、ナチスの組織に限られていたのであろうか？ 若い女性が新しい運動組織に動員されたのは、既存の女性解放運動がもはや女性に解放を約束しなかったからなのだろうか？ 近年女性の間にある差異が注目されているが、先のハーベイは女性の世代間の抗争に焦点を絞る。彼女はこの観点からヴァイマル時代の経済不況期に、若い女性が次々と女性解放組織から離反した理由に迫る。女性解放運動の代表的組織の一つであった「ドイツ婦人団体連合」(BDF)と若い女性達の動きを追うことで、女性解放運動がもはや当時の危機的な状況に対応できなかったこと、かつての反体制的性格を失い利益団体の一つになってしまったことに、若い女性たちが失望した結果、彼女たちは青年運動に合流し、結果的にナチスを支持することになったと分析される。ナチスの女性組織では女性が若く未婚である限り(ナチスの女子青年団は14～18歳の女性から構成され、それより年上の女性は子作りを奨励された)、男性に匹敵する自立性と活動力、そして愛国心が期待されていた。若い女性の多くを惹きつけた理由は、その平等主義的理念にあったのだが、その期待は第三帝国建国の過程で裏切られることになったとハーベイは付け加える¹⁰¹。

以上紹介してきたようなナチスの組織や女性解放運動は、いずれの場合もメンバーが多かれ少なかれある政治的な信条を共有していることが連帯の基盤をなしていたが、一方でライフスタイルを共有する女性たちによってかたち作ら

れていた新しいタイプの動きに注目してみることにしよう。

3-4. 『女ともだち』誌とダーメン・クラブ

第二波フェミニズムの影響で女性の多様性に光が当てられ、女性を専ら被害者として把握する被抑圧史観に反省が迫られることになったが、女性同性愛者が形成した独自の文化が注目された必然性もここにあった。家父長制社会の中で相互に分断されたはずの女性たちの連帯に目を向けることは、女性の歴史推進力を掘り起こす一つの試みなのである。近年では文化を叙述する段階を超え、当時の政治や科学との関連で女性同性愛者を位置付ける試みもあるように、その射程は奥行きと広がりを見せている。そもそも1871年にドイツ帝国刑法典が成立して以来、女性同性愛者が男性同性愛者のように刑法175条で処罰されるということはなかった。しかし女性解放運動の進展による男女平等思想の普及と、1909年の刑法改正論議を契機として、同法を女性にも適用しようとする動きが生まれた。その後、第三帝国時代に至るまでこの動きを継続させたのは、ナチスのイデオログとして有名な A. ローゼンベルクら主として民族主義者であった。彼等は性別役割規範の揺らぎに対して強い危機意識を抱いており、男性と女性の同性愛者に対する迫害を急進化させたと言われている。これに伴い女性同性愛者の自衛的な動きも活発化し、1924年には同法の廃絶を目指して設立された人権同盟が『女ともだち』誌を刊行し、女性たちに連帯を求めたことが判明している。次に1980年代に本格化した同誌に関する研究の中でも、主要な成果を幾つか紹介してみることにしよう。

『女ともだち』誌の先駆的研究者として、先ず I. コクラ (1944～) の名が挙げられるだろう。コクラは1970年代以降女性運動に関わりつつソーシャル・ワーカーや教育学者として活躍し、当該研究分野の代表的人物と目されている。1984年に西ドイツのベルリン美術館にて開催された「エルドラド——1850～1950年のベルリンにおける女性同性愛者と男性同性愛者—歴史、日常生活そして文化」、という展覧会においても、コクラはオーガナイザーとして協力している。当展覧会のパンフレットに掲載された多くの関連論文の中に、コクラが寄稿した論文「ヴァイマル時代から戦後までをレズビアンとして生きる」もある。その論文で、コクラは1920年代のベルリンにおいて、その数が 50 にも上った女性のバーやクラブにおける女優・カヴァレティスト(寄席芸人)・作家といっ

た有名な女性達のみならず、一般の女性達の動きや、店が加盟していた同性愛者の擁護団体、その機関紙を通じた啓蒙活動の様相、そしてこうした活発な動きが、ナチスの台頭によっていかにして弾圧されるに至ったのかを概観している。特に興味深いと思われるのは、世紀転換期からナチス期に至るまで、自立的な女性、レズビアン、女性解放運動が相關するものとして捉えられていたという点である。コクラは1920年代に新興のメディアを通じてもてはやされた「新しい女」が、時局の悪化と共に一変して「不自然」で「退廃した」存在として中傷されるようになったことを跡付け、「女性同性愛者」であることは一つのライフスタイルであることを超え、女性のあるべき姿をめぐる国家、社会、女性が形成したアリーナであったことを示している。また論文の末尾には、強制収容所に送られたレズビアンの生存者がコクラに宛てた手紙も収録されており、第三帝国時代に迫害されたレズビアン達の知られざる運命も明らかにされる⁴³。1982年に彼女は「同時代人の記録に現れた1900年頃の女性同性愛」（1981年）なる論文を元にした『自助と自己組織』というタイトルの学位請求論文を、ブレーメン大学の R. ラウトマン教授に提出し哲学博士の学位を取得しているが、その論文は「レズビアン・サブカルチャーの諸形式——社会形成と社会運動」と改題され、翌1983年にローザ・ヴィンケル社より出版された。彼女はこの論考で社会運動が社会的イデオロギーの分散によってではなく、偏見に立ち向かう主体的な努力から立ち現れてくるものであるという見解を打ち出した。コクラはヴァイマル共和国期に「女性同性愛」という社会的カテゴリーが成立し、彼女達がサークル（*Clique*）を形成し、そこから今日の女性解放運動の中の分離派が誕生する経緯を跡付ける。特にコクラが組織化の過程で重要であると捉えているのがサブカルチャーである。サブカルチャーとは、社会から孤立し、不可視化するレズビアンが、ある特有な振る舞いや行動様式を他のレズビアンと共有することを意味している。具体的なその拠点は女性たちが集う大都市のダーメン・クラブ（*Damenklub*）であり、その媒体が『女ともだち』誌であった。豊富な歴史的資料およびオーラル・ヒストリーの聞き取り⁴⁴を通じて、ダーメン・クラブと同誌が女性同性愛者が接触するきっかけとなり、彼女たちがそこからネットワークを形成していたことが明らかにされる。ダーメン・クラブにおける女性の活動は、享樂的であるばかりではなく、女性のセクシュアリティを積極的に評価する上で非常に重要な意味を持っていた。西欧の

伝統では、バーやクラブにおいて女性は常に男性に付き添われていたことを考慮すれば、女性がこの領域に進出した意義が一層明らかとなる⁴⁰。当時コクラの関心は主として女性のサブカルチャーにあって、その外部にある歴史的諸状況に十分触れてはいないという問題を抱えつつも、それは1970年代以降のドイツ女性史の多様化を象徴し、次に紹介する C. ショップマンらの後進に道を拓いたという意味でも重要な位置を占めている。コクラは同様のテーマの論文を学術雑誌やジャーナリズムに寄稿し、ベルリンの教育大学や工科大学で女性運動や社会福祉活動について教鞭をとる傍ら、1989年以降ベルリン評議会の同性の生活スタイル (gleichgeschlechtliche Lebensweisen) 部局や連邦家庭省 (Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend) の共同研究員を務めている。

コクラの協力で『女ともだち』誌⁴¹の他にも『ギャルソンヌ』や『フラウエン・リーベ』⁴² といった同種の雑誌の研究も進んだが、C. ショップマン (1958～) はともすると内容分析に終始しかねない雑誌研究に風穴を開けた。彼女はミュンスター大学とベルリン自由大学でドイツ文学、歴史学そしてマスコミュニケーション学を学び、ベルリンでは前述のコクラの指導を受けている。彼女はこれまで十分に吟味されていなかった女性のサブカルチャーの有していた政治的側面、そして『女ともだち』誌の代表的な寄稿者とナチスとの密接な関わりにまで踏み込むこんだという点で、他を圧しているように思われる。彼女は前出のパンフレットに1920年代に人気を博した小説『さそり』に関する論文⁴³を寄せたのを皮切りに、精神医学、司法、社会衛生学が女性のセクシュアリティをいかに定義し、女性がそれに対してどのように対応したか、そして1933年以前に始まっていたこの一連の動きが、その後ナチスによる組織的な迫害へと収斂していく経緯をまとめた、『ナチスの性の政治学と女性同性愛者』⁴⁴ という博士論文を発表した。また1920年代にベルリンのサブカルチャー・シーンに関わっていた女性たちに対する聞き取りをまとめた『仮面の時代——「第三帝国」におけるレズビアン女性の生活史』を発表したが、この著作は英訳もされ注目を集めることとなった⁴⁵。彼女は現在著述家としてベルリンで暮らしているという。

この他にも1928年に女性作家 R. M. レーリッヒが発表した『ベルリンのレズビアン女性』というエスノグラフィは、当時のダーメン・クラブの諸相を知

る上で大変貴重な資料である。1981年にアデレ・マイアーが『女ともだち』誌の記事なども加え、本書の復刻版である『リラ色の夜』を新たに出版し、その数年後には改訂版も発表された。友人が偶然にベルリンの蚤の市で見つけた本にマイアーが目をつけたことが、復刻作業のきっかけであったことが改訂版の序文で明らかにされているが、1970年代から脈々と培われていた第二波フェミニズムの問題意識が、埋もれた女性存在の発掘を支えていたのは疑い得ない。

1981年にはまだレーリッヒを知る者の数は非常に少なかったが、コクラやショップマンをはじめとする研究者たちの調査のおかげで、彼女の具体像について知ることができるようになった。ルート・マルガレーテ・レーリッヒは9歳で両親と共にシュヴィーヴスからベルリンにやって来た。彼女の両親はこの地で複数の居酒屋を経営するようになり、彼女自身も商売を手伝った。

1911年から彼女は編集者として働きつつ様々な雑誌に向けて記事を書き、40歳の時にベルリンの「違った」女性達の集う溜まり場で参与観察を行い、先のエスノグラフィを発表したのだった。

彼女はベルリンのクラブ、ダンスホール、居酒屋、カフェの数々な様子を、説得力でありながら、生き生きとした調子で描写している。この本を一読すると女性たちがクラブの催しやクラブが主催する遠足を楽しんでいたことが分かる。しかし、こうした1920年代末の「享楽と空騒ぎ」に光を当てることに対しては、数々の批判が寄せられた。周知のようにこの時期のドイツは、1929年の世界恐慌の影響で深刻な失業と困窮に直面しており、ファシズムの影が目前に迫っていった。「享楽と空騒ぎ」の背後で、ユダヤ人を初めとするマイノリティーに対する迫害も進行していた一方で、コクラが女性の生存者たちに対する聞き取り調査を通じて明らかにしたように、彼女達は困難な時にこそクラブで愉快的な時を過ごし、憂鬱な気分を追いやっていたという。『リラ色の夜』は受動的な存在として理解される傾向にあるナチス以前の女性⁸⁸の中にも、「享楽」を追求する一団があったということを明らかにしたが、クラブで展開された祝祭が、社会の矛盾の受け皿ともなっていた記録として、批判的に本書を読むことも可能であろう。

その他にも『女ともだち』誌を扱った研究論文は、ドイツ国内を中心に幾つも存在する⁸⁹。また当該の研究領域は、社会学の中では近年急速に関心を集めている。国民国家形成においてジェンダーとセクシュアリティの果たした大きな

役割については、祝祭やシンボルという表現形式に注目した G. L. モッセの解釈学的な試みが既に存在するが⁶⁰、それは依然として歴史学の中では周縁的なテーマであり、今日的な問題と視角を数多く提供しながらも、日本においては先行研究の紹介もそれほど進展していない。

おわりに

本論では「身体政治学」という観点から、ナチズムとエージェンシーの間に生きた女性たちを、内在的に捉え返す試みを幾つか紹介してきた。ここではむすびにかえて、前章との関連でドイツ女性史の今後の展望を紹介したい。本論でも幾度か名前を触れた U. フレーフェルト（1954～：ビーレフェルト大学歴史学科教授）が、ドイツの女性史を支えてきた一人であることは、その著作や論文の多くが日本語に翻訳されていることから窺えよう。今後のドイツ女性史の展望を見極める際に指針を与えてくれるような、フレーフェルトの研究成果を続けて紹介してみたい。先ずは姫岡とし子氏の紹介に従って、フレーフェルトの略歴について簡単に触れてみよう。フレーフェルトは社会史の重鎮にして「職員」研究で有名なユルゲン・コッカの指導のもとで研究していたが、コッカの分析の射程には女性「職員」が不在であることを批判した。ジェンダー中立の「職員」という概念によって、女性「職員」も男性「職員」と何ら変わらない存在として分析される。それは男性基準を一般のものとして、それをもって女性を測ることであり、フレーフェルトはその意味で学問の男性中心主義に異を唱えたのであろう。しかし男性中心主義を批判する末に、男性社会から分離し女性史をゲットー化させる、ということのない戦略をフレーフェルトは編み出した。彼女は市民社会における男性の決闘⁶¹、男性からのみ構成される軍隊⁶²という切り口から男性史を切り拓き、男性の置かれた特殊な状況を明らかにする中で、女性のそれを逆照射しようと目論んだ。男性の行動は「それがどこで生じるにせよ、つねに女性という他者に関連付けられ」ているのであり、男性固有の行動は「相対的にしか理解できない」。それは生物学的メルクマールに依拠して性別を同定するような本質主義を超克した、両性の関係史、つまりジェンダーの歴史学への移行でもある。フレーフェルトはさらに、女性労働者の生活を社会史的に跡付けることを超えて、「もっと分析的に、法律や階

級関係の中に差異化カテゴリーとしてのジェンダーがどのように組み入れられたかを問う」ような近年の傾向を歓迎しつつも、その差異化が「なぜ」起こるのかという点に踏み込む研究が少ないことを指摘している。フレーフェルト自身は「兵士、国家国民としての男らしさ」(1996)という論文で「男らしさの歴史的構造」は何かという問題提起を受け、19世紀初めのプロイセンにおける徴兵制導入の例をとり、これを機に「戦士としての男の機能」が一般化され、「兵役は名誉なこと」であり、その「名誉を介した個々の男性のつながり」として軍隊が評価されるようになった経緯を跡付ける。さらにこの軍隊は「男らしさの学校」でもあり、そこで男性は「男」たるべく訓練され、「男らしさ」の規律を学んだ。家族的、社会的関係から引き離された多様な男達は、画一的な国民あるいはジェンダー・システムへと投げ込まれた結果、女性と男性の差異は一層明確なものとなり、この男女の分断は生活世界においても、また制度的にも固定化されることになったという。社会史や文化史は勿論、言説分析の手法を大いに活用した彼女の功績は高く評価されるであろう。しかし本論で紹介してきた身体政治学という観点から検討すると、「男らしさ」と「女らしさ」の規律化と訓練に対して、当人達がいかなる反応を示していたか、あるいは当人達が意識的・無意識的に抵抗したのであれば、それはいかなる形を取ったのか、という点が正直なところ明確には見えてこない。それは性役割規範の侵犯、あるいは「逸脱」の形をとったことが予想されるが、フレーフェルトはこの点には深入りしていない。ところが、第二帝政期からヴァイマル共和国期を経て第三帝国時代に至るまで、異性装や男性同士の同性愛行為といった、既存の性役割規範からの逸脱は刑法で処罰されていた。しかも、戦後ドイツでは社会通念の変容に応じて刑法改正作業が続けられたが、先に触れた刑法175条が完全に廃棄されたのはつい最近のこと(1994年)である。男女の差異化が「なぜ」起こるのかというフレーフェルトの問いに立ち返るのであれば、男女の差異を明確に規定した同法の成立過程に着目する意味はあるだろう。誰が、いかなる理由で、この刑法の必要性を正当化したのであろうか。この経緯を仔細に吟味することによって、男女の差異化を推進するメカニズムに一步なりとも近づくことができるかもしれないが、こうした問題については稿を改めて論じることにはしたい。

【註】

- (1) クローディア・クーンズ／姫岡とし子 監訳・翻訳工房「とも」訳『父の国の母たち：女を軸にナチズムを読む』時事通信社 1990年
- (2) Koonz, Claudia, *The Mobilization of Gender and Race in War and Memory. Two Cases: Germany and Japan*, at Tokyo University, April 10, 2000.
- (3) ドイツー日本研究所 国際シンポジウム「歴史の政治学－フェミニスト研究者が戦争戦後を考え直す」（2000年4月13～14日）には、日本からはパネリストとして上野千鶴子氏（『記憶の語り直し方』）の他に、鈴木裕子氏（『日本軍性奴隷問題へのアプローチ－被害者性から加害者性へのパラダイム・チェンジをめぐる』）、大越愛子氏（『日本版歴史修正主義の陥穽』）、藤目ゆき氏（『女性史研究と性暴力パラダイム－戦後の米軍性暴力について』）、加納実紀代氏（『銃後の女たち－国防婦人会を中心に』）他が参加した。
- (4) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社 1998年
- (5) 小玉亮子「＜少子化問題＞の歴史的検討に向けて」『近代幼児教育史研究 7』（1993）, pp. 43-57
- (6) 姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房 1993年
- (7) 田村雲供『近代ドイツ女性史－市民社会・女性・ナショナリズム－』阿吡社 1998年
 若尾祐司「書評：田村雲供『近代ドイツ女性史－市民社会・女性・ナショナリズム－』」『史学雑誌 第108号』（1999）
 原田一美「書評：田村雲供『近代ドイツ女性史－市民社会・女性・ナショナリズム－』」『歴史学研究 第732号』（2000）
 日暮美奈子「書評：田村雲供『近代ドイツ女性史－市民社会・女性・ナショナリズム－』」『歴史評論 第597号』（2000）
- (8) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社 1998年
- (9) J. Evans, Richard, *Feminism and Female Emancipation in Germany 1870-1945: Sources, Methods, and Problems of Research*, in: *Central European History* 1976, pp.323-351
- (10) 社会史は「近代化」や「工業化」の概念を用いて政治構造とその過程を研究したが、それが「国家中心史観」・「進歩史観」との批判を受け、1980年代には H. メディック を中心とするゲッチンゲン学派が登場する契機とも

なった。メディックの「日常生活史」に関しては次に挙げる著作に詳しい。

早島 瑛「社会と国家のはざままで」 竹岡敬温・川北 稔編 『社会史への途』
有斐閣選書 1995年, p.141-205.

- (11) C. Delphy, *Feind Nr. 1*; 英訳では *The Main Enemy: A Materialist Analysis of Women's Oppression*, London 1977. 邦訳: 井上たか子 他訳『何が女性の主要な敵なのか—ラディカル唯物論的分析』勁草書房 1996年

- (12) Duden, Barbara, in: *Journal für Geschichte*, H. 1, 1980.

- (13) C. v. ヴェールホーフ「「シャドウ・ワーク」か家事労働か: 労働の現在と未来」, B.ドューデン・C. v. ヴェールホーフ/丸山真人編 訳『家事労働と資本主義』岩波現代新書 1998年, pp. 49-100所収.

ウーテ・フレーフェルト/若尾祐司 他訳 『ドイツ女性の社会史 — 200年の歩み — 』晃洋書房 1990年

Frevort, Ute, *Frauen-Geschichte zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit*, Suhrkamp 1986.

- (14) Hausen, Karin, *Öffentlichkeit und Privatheit. Gesellschaftspolitische Konstruktionen und die Geschichte der Geschlechterbeziehungen*, in: Karin Hausen/Heide Wunder (Hrg), *Frauengeschichte und Geschlechtergeschichte* Frankfurt/Main 1992, S. 81-88

- (15) Osborne, Cornelia, *The Politics of the Body in Weimar Germany. Women's Reproductive Rights and Duties*, Macmillan 1992.

- (16) Canning, Kathleen, *Feminist History after the Linguistic Turn: Historicizing Discourse and Experience*, in: *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 1994, vol. 19 • no. 2, The University of Chicago.

- (17) H. ホワイト「歴史のプロット化と真実の問題」, ソール・フリードランダー編/上村忠男他 訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社 1992年

- (18) Hausen, Karin, *Die Polarisierung der "Geschlechtscharaktere" - Eine Spiegelung der Dissoziation von Erwerbs- und Familienleben*, in: Werner Conze (Hrg), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas* 1976, S.363-393

Duden, Barbara, *Geschichte unter der Haut : ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730*, Klett-Cotta, 1991.

邦訳: バーバラ・ドゥーデン/井上茂子 訳『女の皮膚の下: 18世紀のある医師とその患者たち』藤原書店 1994年

- (19) 若尾祐司『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会 1996年 参照。

つい最近では寺澤由紀「アメリカ女性史学会の動向」『歴史評論』No. 600, 2000年 4月号, pp. 67-75

- (20) Walser, Karin, *Prostitutionsverdacht und Geschlechterforschung - Das Beispiel der Dienstmädchen um 1900*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 11 1985, S.420-446.

- (21) Osborne, Cornelia, *The New Woman and Generation Conflict: Perceptions of Young Women's sexual Mores in the Weimar Republic*, in: *Generations in Conflict*, Cambridge 1995, pp.137-163.

ヴァイマル共和国期の社会を彩る現象の一つに「新しい女」の出現があった。この現象をいかに理解するべきかをめぐり、これまで意見が分かれてきた。「新しい女」の出現はメディアが喧伝したに過ぎず、実際は大都市の局地的な現象であったとして、その意義が過少評価される一方で、最近では「新しい女」とは新しいライフ・スタイルを実践した先駆者であって、ジェンダー規範に異議を申し立てたと再評価されている。

- (22) Koonz, Claudia, *Nazi Women Before 1933: Rebels Against Emancipation*, in: *Social Science Quarterly*, 1976 pp.553-563.

- (23) Kokula, Ilse, *Weibliche Homosexualität um 1900 in zeitgenössischen Dokumenten*. Berlin, 1981

- (24) Bock, Gisela, *Zwangssterilisation im Nationalsozialismus : Studien zur Rassenpolitik und Frauenpolitik*. Westdeutscher Verlag, 1986

ナチスの断種政策 (Sterilisationspolitik) は、アーリア人の優位性を示すために民族的・遺伝的に「劣等な者」を駆逐する人種政策であると同時に、それは G. ボックによれば女性政策の一環でもあった。特筆すべきは、断種手術を施されたのが家事や育児が疎かである女性や、売春婦や異性との交友の多い女性だったという。これは手術をするか否かの判断基準が男性の視点から見た恣意的な女性像に委ねられていたことを示す。女性と比べその比率は若干低いものの、男性にも断種手術を施された者達がいたが、彼らの多くは居住地を転々としていた非熟練労働者であった。専門的技能を持つ者やインテリ層が手術されるケースは少なかった。それは一見して階層差が断種手術の基準をなしていたようであるが、ボックによれば「躁鬱病」といった理由から断種手術される者の中で、女性の方が男性のそれに比べて2倍も多い例

があることから、むしろ性差が強力に作用していたと主張する。

- (25) 寺澤由紀「アメリカ女性史学会の動向」『歴史評論』No. 600, 2000年 4月号, pp. 67-75 参照。
- (26) ミヒャエル・プリント「ナチズムと近代化—ドイツにおける最近の討論—」, 山之内靖他『総力戦と現代化』 柏書房 1995年, pp. 57-78所収
- (27) Fest, Joachim C, *Das Geschichte des dritten Reichs. Profil einer totalitären Herrschaft*, München 1963, S. 371.
- (28) Mason, Timothy, *Arbeiterklasse und Volksgemeinschaft*, Opladen 1975.
- (29) Stephenson, Jill, *Women in Nazi Society*, London, New York 1975.
- (30) Bock, Gisela, *Geschichte, Frauengeschichte, Geschlechtergeschichte*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 14, 1988.
- (31) G. シュワルツは1995年以来ハンプルク社会研究所のジェンダー史の上級研究員で、研究プロジェクト「SS女性集団 1939~1945」に取り組んでいる。
1996年以降いわば「加害者」の側である強制収容所の女性についての、幾つかの著作がある。シュワルツも先頃来日し、「歴史の政治学—フェミニスト研究者が戦争戦後を考え直す」(2000年4月14日)において「「未来の支配者」—ナチ親衛隊(SS)の女たち」という題目のケース・スタディーを発表していた。シュワルツには、世紀転換期のドイツの精神科医・性科学者による女性同性愛者に対する偏見に満ちた言説をまとめた、次に挙げる「男性の理論における「男^{おとこ}女^{おんな}」」というタイトルの論文もある。
Schwarz, Gudrun, "Mannweiber" in Männertheorien, in : *Frauen suchen ihre Geschichte. Historische Studien zum 19. und 20. Jahrhundert*, Verlag C. H. Beck München 1983
- (32) Manns, Heide, *Frauen für den Nationalsozialismus. Nationalsozialistische Studentinnen und Akademikerinnen in der Weimarer Republik und im Dritten Reich*, Leske+Budrich, Opladen 1997
- (33) Koonz, Claudia, *The Fascist Solution to the Women Question in Italy and Germany*, in: Renate Bridenthal, Claudia Koonz, Susan Stuard (ed), *Becoming Visible*, Houghton Mifflin 1997, pp. 499-533.
- (34) Harvey, Elizabeth, *Gender, Generation and Politics: Young Protestant Women in the Final Years of the Weimar Republic*, in: *Generations in Conflict*, Cambridge 1995,

pp.184-209.

- (35) Herbert, Ulrich, "Generation der Sachlichkeit." *Die völkische Studentenbewegung der frühen zwanziger Jahre in Deutschland*, in: Frank Bajohr/Werner Johe/Uwe Lohalm (Hg.), *Zivilisation und Barberei. Die widersprüchlichen Potentiale der Moderne*, Hamburg 1991, S. 115-144.
- (36) Manns, Heide, *Frauen für den Nationalsozialismus. Nationalsozialistische Studentinnen und Akademikerinnen in der Weimarer Republik und im Dritten Reich*, Leske+Budrich, Opladen 1997
- (37) Frevert, Ute, *Frauen an der 《Heimatfront》*, in: C. Kleßmann, *Nicht nur Hitlers Krieg: der Zweite Weltkrieg und die Deutschen*, Dusseldorf 1989, S. 51-69.
- (38) Reese, Dagmar, *The BDM Generation: A Female Generation in Transition from Dictatorship to Democracy*, in: *Generation in Conflict*, Cambridge 1995, pp. 227-246.
- (39) Harvey, Elizabeth, *The Failure of Feminism? Young Women and the Bourgeois Feminist Movement in Weimar Germany 1916-1933*, in: *Central European History* vol. 28 1995, pp. 1-28.
- (40) Kokula, Ilse, *Lesbisch leben von Weimar bis zur Nachkriegszeit*, in: *Eldorado. Homosexuelle Frauen und Männer in Berlin 1850-1950*, hg. v. Berlin Museum, Berlin 1984, S.149-161.
- (41) Kokula, Ilse, *Jahre des Glücks, Jahre des Leids. Gespräche mit älteren lesbischen Frauen*. Dokumente, Kiel 1986.
Kokula, Ilse, "Wir leiden nicht mehr, sondern sind gelitten!" *Lesbisch leben in Deutschland*, Köln 1987.
- (42) Kokula, Ilse, *Formen lesbischer Subkultur - Vergesellschaftung und soziale Bewegung*. Verlag rosa Winkel Berlin 1983
- (43) Vogel, Katharina, *Zum Selbstverständnis lesbischer Frauen in der Weimarer Republik*, in: *Eldorado. Homosexuelle Frauen und Männer in Berlin 1850-1950*, hg. v. Berlin Museum, Berlin 1984, S.163-168.
- (44) Schlierkamp, Petra, *Die Garçonne*, in: *Eldorado*, Berlin 1984, S.169-179.
- (45) Schoppmann, Claudia, *Ein Lesbenroman aus der Weimarer Zeit: >Der Skorpion<*, in: *Eldorado*, Berlin 1984, S.197-199.
- (46) Schoppmann, Claudia, *Nationalsozialistische Sexualpolitik und weibliche Homosexualität*.

Frauen in Geschichte und Gesellschaft; Bd. 30. Centaurus - Verlag 1991.

- (47) Schoppmann, Claudia, *Zeit der Maskierung - Lebensgeschichten lesbischer Frauen im Dritten Reich* 《Orlanda Frauenverlag Berlin 1993 (英訳: Allison Brown trans., *Day of Masquerade: Life Stories of Lesbians During the Third Reich (Between Men-Between Women)*, Columbia Univ Pr, 1996)

- (48) Bridenthal, Renate, *Beyond Kinder, Küche, Kirche: Weimar Women at Work*. in: *Central European History*, pp.148-166. Atlanta, Georgia: Emory University, 1973

「子供」(Kinder), 「台所」(Küche), 「教会」(Kirche) の三つは、現代のドイツにおいても女性の負担になるもの、女性の社会進出や自己実現を阻むもの、として理解されている。この三つの頭文字をとって3Kと総称されて普及しているが、これは、ナチスのイデオロギーに由来している。このために一般的に、戦前のドイツ人女性は一枚岩的に抑圧されていて、自己決定も制約されていたというイメージが強い。

この他にも井上茂子「ナチ体制に対する女性の支持と関与 — 投票行動と出産政策の問題を中心に」『歴史評論 552』校倉書房 1996年, pp. 77-87; 斎藤哲「ヴァイマル時代における勤労女性と余暇」『政経論叢 (明治大学) 第65巻 第5・6号』1997年 等を参照。

- (49) Bär, Gisela, *Frauenlokale im Vorkriegs-Berlin: Authentischer Bericht*, in: *Unsere kleine Zeitung* (Juli/August 1976) Nr. 7/8, S. 10-11.

Bär, Gisela, *Noch einmal die goldenen 20er*, in: *Unsere kleine Zeitung* (September 1976) Nr. 9, S. 14-15.

Baumann, Ina, *Die Figur der weiblichen Homosexuellen in der deutschen Literatur des ersten Drittels des Jahrhunderts*. Wuppertal 1982. (Staatsexamenarbeit).

Wolff, Charlotte, *Augenblicke verändern uns mehr als die Zeit: Eine Autobiographie*, Weinheim/Basel 1982.

Hengsbach, Monika, *Bewältigungsversuche des Stigmas weiblicher Homosexualität in literarischen Texten des 20. Jahrhunderts*. Bielefeld 1983. (Magisterarbeit).

Kokula, Ilse, *Der linke Flügel der Frauenbewegung als Plattform des Befreiungskampfes homosexueller Frauen und Männer*, in: Dalhoff, J. (Hg.), *Frauenmacht in der Geschichte: Beiträge des HistorikerInnentreffens 1985 zur Frauengeschichtsforschung*, Düsseldorf 1985, S. 46-64.

Vogel, Katharina, *Die Theorie vom dritten Geschlecht als Grundlage für ein neues Selbstverständnis von Frauen zu Beginn des 20. Jahrhunderts*. Berlin 1985. (Diplomarbeit).

Claus, Doris, *Selbstverständlich lesbisch in der Zeit der Weimarer Republik. Eine Analyse der Zeitschrift >Die Freundin<*. Bielefeld 1987. (Staatsexamenarbeit).

Peters, Wilma, *Das Bild der lesbischen Frau in der Literatur der Weimarer Republik*. Amsterdam 1998 (Dissertation.)

Mihm, Uta, *Kommunikationsstrukturen, Organisationsformen und Treffpunkte der frauenliebenden Frauen in der Weimarer Zeit*, Unveröffentlichte Hausarbeit, TU Berlin 1992.

Vollmer-Heitmann, Hanna, *Wir sind von Kopf bis Fuß auf Liebe eingestellt*, Hamburg 1993.

Schipkowski, Brigit, *Lesbische Subkultur im Berlin der zwanziger Jahre*, in: Petra Bock/Katja Koblitze (Hrsg.),

Neue Frauen zwischen den Zeiten, Ein studentisches Projekt an der FU Berlin in Zusammenarbeit mit der Gedenkstätte deutscher Widerstand 1995, pp. 236-243.

(50) G. L. モッセ/佐藤卓己・佐藤八寿子 訳 『ナショナリズムとセクシュアリティ市民道徳とナチズム』 柏書房 1996年

(51) Frevert, Ute, *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft*, München 1991.

(52) ウーテ・フレーフェルト/星乃治彦 訳「兵士、国家国民としての男らしさ」, トーマス・キューネ編/星乃治彦訳『男の歴史 市民社会とく男らしさの神話』 柏書房 1997年, pp. 65-84.

(53) ウーテ・フレーフェルト/田邊玲子 訳「ドイツにおける女性史とジェンダーの歴史学 ―発展過程・問題点・将来展望―」『思想』(1999 4/No. 898) 岩波書店「特集 ジェンダーの歴史学」, pp. 160-172 所収

Frevert, Ute, *Frauen- und Geschlechtergeschichte in Deutschland - Entwicklungen, Probleme, Perspektiven*, 1996.

(54) ウーテ・フレーフェルト (聞き手) 荻野美穂・姫岡とし子/荻野美穂 訳「<インタビュー> 女性史からジェンダー史へ」『思想』(1999 4/No. 898) 岩波書店「特集 ジェンダーの歴史学」, p. 178